

山口剛先生の思い出

安藤 常次郎

新しい学制による高等学院が開校したのは大正九年。中学四年修了者も受験できる三年制の予科であり、翌年には中学卒業以上の者を対象にした二年制の学院もできて、前者を第一早稲田高等学院、後者を第二早稲田高等学院と称した。私は一年浪人のち、はるばる九州博多から、急行でも三十時間かかる東京に出てきて、開校したばかりの学院を受験、人数が不足したのか補欠のための面接に呼び出された。その相手をしたのが教頭の野々村戒三先生であって、「中学はどこですか」「福岡の修猷館です」「それはなつかしい。わたしの出身は大方です」と九州の話がはずみ、簡単に入学を許されることになって、E組に編入された。DとEの二組が文科志望の者のクラスであり、その両方の主任が山口先生であった。国語担当で、いきな和服姿は大学卒業まで続いていたが、たまには村夫子然たる洋服姿になったり、当時の中国服で現われて、われわれを驚かされたこともあった。胸形に居を構えているということであり、下町情緒にあこがれを持っていた私は、羨好みの和服姿に魅力を感じ、日本橋の白木屋で安物の紬を買ってきて、自分も羽織・袴で登校したりしたものである。

二年のときであつただらうか、講義に源氏物語を取上げられ

たが、訳などはせず、われわれにあてて読ませ、その部分についての文学的な鑑賞をさせる、という教えかたであつた。「わたしと言ふことをいよいよ筆記してはいけない。書きとめておきたいことがあつたら、官製はがき一枚を毎回持つてきて、それに書ける程度の要点だけを書きなさい」と言われたのも忘れない。雑談のときには、べらんめえ調も出て、てっきり江戸っ子だなと思つていたが、やがて土浦生まれということが判つたし、片方の耳が遠くて「聾不言」と号していられたのを、これは中学時代のはげしい剣道の修業によるものだと言はれてはいたが、実は中耳炎によるものであつたらしい。しかし胸形の家に行くようになってから、これは金剛兵衛の太刀だと自慢して見せられたが、その鮮かな抜きっぷりは、いかにも剣道の達人らしかった。茶目っ気もある面白い先生で、クラスの大部分の者が傾倒していたのである。

近世文学が専門であることは次第にわかつてきたが、高等師範部出身のためか漢文学にも素養が深く、平安文学その他にも関心を持っていられた。そして早稲田以外の学者では藤岡作太郎氏に敬意を示して、その『国文学全史 平安朝篇』を是非読めと勧められたが、当時この本は手に入れたがたく、数年後の大

正十二年に岩波書店から再版されたときは、三円五十銭を少し高いと思いながら早速買ったことを思い出す。この本は現在もわたしの書棚に、でんと存在している。

入学したときは英文科志望であったが、子供時代からの芝居好きで、学院時代には同志をさそって、歌舞伎劇場の大入場通いをさかんにしていたので、山口先生に傾倒すると共に、歌舞伎にも詳しいように見えるこの先生について歌舞伎の研究を試みたくなり、そのため国文科に転ずることを許して貰おうと考え、二年生の終わり頃と思うが、その旨を先生に申し出ると、「よく話を聞きたいから、私のうちに来なさい」ということになって、電車をどこでおりましたか忘れたが、吾妻橋に近い先生宅に出掛けた。駒形通りと称していたように思うが、隅田川に沿うて並んでいる家の中に「根岸」と表札のかかったいきな家があり、狭い通りの真向かいにはいかにも古い二階家があって、それが先生の住居であった。二階に招じられたが、階下も階上も古めかしい本ばかり、その本のあいだにさし向かって話をするようになったが、見渡すと数箇所にはベツが置いてあるので、「何にするのですか」とたずねたら、雨漏りのする所に置いているのだということであった。それから、きびしい表情になられて、転科のことだが、君のような男が歌舞伎研究を志しても、通になるだけだから賛成できない。平安朝文学もやるというんだったら国文科にかわってもよいが、どうだ、それができるか、と突込まれた。この先生の心配は、私と同じ下宿屋にいて親しくしていた中谷博君が、『学友会雑誌』編集の中心

になっており、山口先生がこの雑誌の責任者であったところから、中谷君に奨められて書いた河竹黙阿弥論を先生が読まれて、そのきざな通人ぶった書きかたに抵抗を感じていられたからだ、のちに自覚したことであった。そのときは、すがりつきたい気持であったから、「はい。そのように努力いたします」、「だったら、ぼくが面倒を見てやる」とそれから打解けられて、私は身の上話などをして時間をすごし、晩飯は、向かいの親戚にあたる根岸家の隅田川に臨んだ部屋でご馳走になり、嬉しさ一杯の気分になって帰ってきた。なおこの頃すでに先生は、『好色一代男』と『源氏物語』との関係の追求に心をひそめていられたようであり、それが「平安文学もしっかりやるか」という表現になったのではないかと、これらのものになって思ったことであった。

それから数年後、卒業論文はやはり平安文学でなく、近松の浄瑠璃を取上げて、大学時代にはさかんに文楽を見たり能を見たりしていたので、近松の作品の演出上のことを問題にしたが、ことに能との関係の部分については、宝生流の話をやっていて能もよく観ていられた主査の五十嵐先生が興味を持たれ、いろいろ質問されるのを、その左右で窪田・山口の両先生が、にやにや笑いながら聞いていられたのを思い出す。そのころ山口先生は、大正十二年九月一日の関東大震災で駒形の家を焼け出され、窪田先生宅の裏に、結婚して新居を構えていられた。そして大正十五年三月に卒業後、大学院に籍を置いて、週に一回くらい先生宅に出掛けて、雑談のような指導を受けることに

なったのだが、ある日、その雑談中に、早大哲学科出身の加藤という人がたずねて来られて、かたわらで聞いていると、興文社から日本文学の名作をレクナム本の形式で出版したいのですが、まず江戸時代のものから始めることにして、先生に協力をお願いできないでしょうか、という話であった。細かい点の問答は忘れたが、先生が乗気になられて、やがて実現することになったのが『日本名著全集』江戸文芸の部である。そして私も、東洋文庫にある浮世草子の本を筆写のために通わされた

した。わが書棚に全巻が揃っているのも、少しばかりの手伝いに対する過分の謝礼であり、先生の口利きによるものであった。なお私は、昭和三年から第二早稲田高等学院の講師になったが、国語科の主任は山口先生であり、先生の親友であった会津八一先生も英語の教師として、休み時間の雑談に花を咲かせていられた。そのほかいろいろな思い出を語りたいが、枚数の制限があるので割愛する。なお、先生が弁天町に移られてからのことは、私よりも詳しい人が多い。

新刊紹介

櫻井光昭著

『敬語論集—古代と現代—』

前著『今昔物語集の語法の研究』（昭41）以後の論文のうち、敬語関係のものをまとめたのが本書である。第一章古代敬語試論、第二章院政・鎌倉・室町期の敬語、第三章『古事談』の尊敬語、第四章『撰集抄』の敬語、第五章「殿」と「様」の使い方、「君」の由来と用法、第六章マス（デス）による敬語表現の最低規準、第七章堀辰雄氏『かげろふの日記』に見る敬語表現、の

全七章から成り、巻末に作品別古典の敬語表覧を付する。

第二章は当時の敬語を概観する上で不可欠の論考であるが、言文二途の時代であることへの考慮も見られる。第四章は文語語彙の出現或いは一般化という観点から論じ、注目される。第六章は敬語教育の資料としても有益である。敬語（史）研究上必読の論文が改稿補訂の上、一書に収められたわけで、本書が今後の敬語研究を益するところは大きいと思われる。

（昭58・4 明治書院 A5版 三三八頁 四八〇〇円）〔川岸敦子〕

お願い

『国文学研究』では、会員の皆様の新刊書の紹介につとめております。お気づきの新刊書がございましたら、編集委員会まで御一報願います。

また、著書が刊行されました際には、国文学研究室に是非一部御寄贈いただけますようお願い申し上げます。大学院生、学部学生の閲覧に供し、研究資料として活用いたします。

（送り先）

〒一六二 新宿区戸山一―二四―一
早稲田大学文学部国文学研究室